今回令和３年１２月１２日に開催される京都府歯科技工士会生涯研修では、前半に、これからの歯科医療における歯科技工士のあるべき姿について課題を提案し、時間の許す限り聴講して戴いた皆様と共にディスカッションして少しでもお役に立てれば幸いに思います。

近年、超高齢社会を迎え高齢者歯科医療と共に在宅歯科医療も増加傾向になって来ているようです。厚生労働省の歯科保健医療のニーズ動向によると、在宅歯科医療・高齢者歯科や摂食・嚥下といった高齢者歯科医療の充実が求められ、義歯の質的需要が高度化して来ています。また、歯科医療現場も高度に発達した歯科医療技術の進歩により、歯が喪失した無歯顎者の疾病構造も著しく変化してきていると思われます。義歯製作もより簡便で、客観的な根拠から効率的な“二義的人工臓器義歯“の製作システムとなる供給体制が求められています。そこで無歯顎臨床で最も重要な要素である印象採得と咬合採得から得られた咬合位（垂直的・水平的）下顎位を考察し、歯冠修復学・インプラント補綴に役に立つ仮想咬合平面の設定基準について考察したいと考えています。

また同時に、症例を担当する歯科技工士も歯科医師の診断と治療計画をよく熟知したうえで、各ステップを慎重に進めなければならないと思います。印象体を大別すると、概形印象体と機能印象体に分類され模型上に表現された組織を十分熟知した模型分析が重要であります。

次に仮想咬合位（Tentative　Bite）と仮想咬合平面（Tentative　Occlusal Plane）の考察も大切であります。

異なる臨床症例に対する咬合平面の設定基準と咬合彎曲の与え方について生理学的、力学的に考慮した部位に人工歯排列を行い、口腔内に調和した咬合と咬合様式を付与することが大切であります。

時間があればデジタルデンチャーの概要について考察して視たいと思います。

（公益社団法人）日本歯科技工士会　生涯研修認定講師
佐藤補綴研究室　佐藤　幸司